

教育シンポジウム 2 : 臨地実習前技能修得到達度評価

臨地実習前技能修得到達度評価におけるアンケート結果報告 および評価方法の今後の展望

富 山 智香子 *

要 旨 本稿は、令和 4 年度より導入された「臨地実習前技能修得到達度評価」が単位化された後、初年度となる令和 6 年度の実施状況を明らかにすることを目的として、日本臨床検査学教育協議会正会員校を対象にアンケート調査を行った。回答の得られた 59 校のうち、実施率は 88.1% であり、実施時期は臨地実習開始前 1 ヶ月以内が最も多かった。A 項目では心電図、血液塗抹、尿定性、ABO 血液型、Gram 染色が多くの養成校で実施され、共通項目では接遇・検体確認、身だしなみ・衛生が約 9 割の養成校で評価に用いられていた。一方で、評価項目の多様性、試験時間、評価者数等、運用面における課題も明らかとなった。今後は、評価項目の標準化・スリム化に加え、外部評価の導入についても検討が必要である。これらの改善により、本評価が臨地実習への円滑な移行を支援し、質の高い臨床検査技師養成に寄与することが期待される。

キーワード 臨地実習前技能修得到達度評価、アンケート調査、標準化、外部評価

はじめに

臨地実習は、臨床検査技師養成課程において専門的知識と技能を統合し、臨床現場での実践力を養う重要な教育機会であるとともに、学生が初めて臨床現場を経験する場でもある。令和 4 年度より適用された新カリキュラムにおいて、臨地実習関連単位数が指定規則 7 単位から 12 単位に変更された。この 12 単位の中に「臨地実習前技能修得到達度評価」(以下、本評価)¹⁾²⁾が 1 単位として導入され、令和 6 年度には単位として正式に養成校で実施され始めた。本評価は、学内実習で修得した内容を再確認し、臨地実習に臨むために最低限

必要な知識・技術を客観的に確認するという、学内実習と臨地実習をつなぐ役割を担っている。

第 17 巻では、本評価の試行における実施状況と課題を報告した。本稿はその第二報として、単位化後初年度となる令和 6 年度の実施状況を基に、評価項目の運用実態や外部評価導入の可能性等を提示するものである。

また、本稿は、第 19 回日本臨床検査学教育学会学術大会 教育シンポジウム 2 で発表した『令和 6 年度「臨地実習前技能修得到達度評価」実施に関するアンケート結果報告と共通項目の標準化についての提案』および『臨地実習前技能修得到達度評価における評価方法の今後の展望』の内容を統合

* 日本臨床検査学教育協議会学術委員会委員長 / 新潟大学医学部保健学科検査技術科学専攻
tomiyama@clg.niigata-u.ac.jp

し、学術委員会が実施したアンケート調査の結果と、標準化に向けた課題および今後の方向性について報告する。

I. 方 法

調査は令和7年3月12日から3月24日にかけて、日本臨床検査学教育協議会の全正会員校を対象に実施した。59校から回答を得て、その内訳は3年制専門学校12校、3年制短期大学3校、4年制国公立大学18校、4年制私立大学26校であった。調査内容は、本評価の実施状況、実施時期、評価項目、試験時間、評価教員数等であり、得られたデータを基に解析を行った。

II. 結 果

臨地実習前技能修得到達度評価の実施率は88.1%であった。また、実施時期は臨地実習開始0～1ヵ月前が最多であり、学年進行に応じて多様な時期に実施されていた(図1)。評価に要した総時間は21～30時間が最多で、演習形式が主流

であった(表1)。演習(トレーニング)時間は10～20時間が最も多く、回数は5回から30回まで幅広いバリエーションがみられた。

1. 評価項目の実施状況

A項目(必ず実施すべき項目)では、標準12誘導心電図検査、血液塗抹標本作成・鏡検、尿定性試験紙法、ABO血液型検査、Gram染色が多くの養成校で採用されていた。

B項目(実施が望ましい項目)については、尿沈渣および病理検査に関連する項目の追加を求める意見が寄せられた。

C項目(可能であれば実施する項目)については、臨床検査技師として基本的な手技であることからA項目へ希望する意見もみられた。

共通項目については、接遇・検体確認、身だしなみ・衛生が約9割の養成校で評価に用いられており、挨拶や顕微鏡標本の扱い等、追加すべき項目に関する意見も確認された。

2. 試験形式と評価体制

実技試験に要した時間は10時間未満または

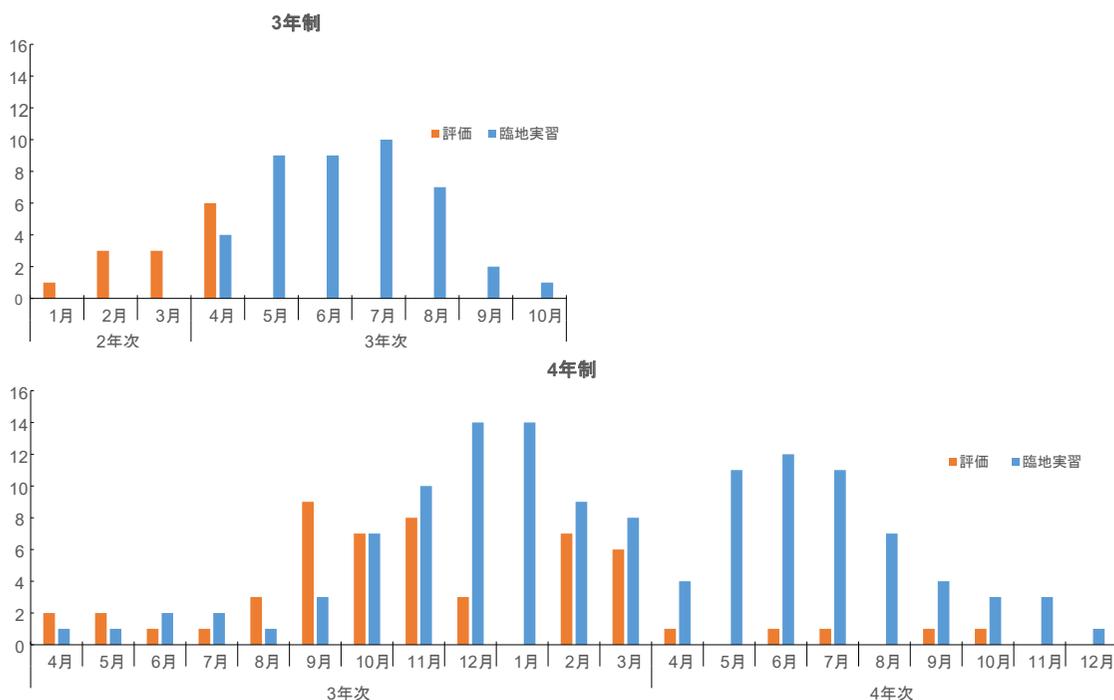


図1 臨地実習前技能修得到達度評価の実施時期

表1 令和6年度に実施された「臨地実習前技能修得到達度評価」のまとめ

実施時期	臨地実習開始0～1ヵ月前
実施時間数	21～30時間
形式	演習
評価に使用されていた主なA項目	① 標準12誘導心電図検査
	② 血液塗抹標本作成・鏡検
	③ 尿定性試験紙法
	④ ABO血液型検査
	⑤ Gram染色
評価に使用されていた主な共通項目	① 接遇・検体確認
	② 身だしなみ・衛生
実技試験に要した時間	① 10時間未満
	② 10～20時間
実技試験に要した時間	1～2日間
実技試験での学生に対する評価教員数	① 学生1名：教員1名
	② 学生1～3名(平均2.75名)：教員1名

10～20時間が多く、1～2日間で実施されるケースが主流であった。実技試験と筆記試験を組み合わせる形式が一般的であり、再試験を導入している養成校もあった。

評価教員数は「学生1名に対し教員1名」が最も多かったが、「学生1～3名を教員1名で評価する」体制も多くみられた。

III. 考察と今後の展望

アンケート結果から、臨地実習前技能修得到達度評価は概ね円滑に実施されており、各養成校における実施項目の傾向も明らかとなった。一方で、評価項目の多様性、試験時間の制約および評価者数の不足等、運用上の課題も示された。

今後、学術委員会では評価項目の標準化・スリム化を進め、項目の精選による実施時間の短縮を図る必要がある。令和6年度は単位履修としての初年度であることから、A・B・C・共通項目の分類は当面現行のまま運用し、その動向を注視することが適切と考えられる。しかし、調査を重ねることで分類や内容の見直しが必要となる点が明らかになると予想される。

共通項目については、現行の「接遇・検体確認」

「身だしなみ・衛生」は妥当と考えられるものの、「挨拶」等の新規項目の追加やC項目である「ピペット操作」を共通項目へ移行する可能性等、改善の余地が示された。また、A項目に含まれるスパイロメトリー評価の難しさ、尿定性試験と尿沈渣のセット化の必要性等、具体的な改善点も指摘された。これらは臨地実習ガイドライン³⁾との整合性を踏まえ、慎重かつ継続的な議論が必要と考える。

1. 外部評価の導入について

本評価の標準化および客観性を高めるためには、外部評価の導入も重要である。候補としては、養成校内教員、実習先教員、地域団体、外部評価組織等、多様な評価者が想定される。外部評価の導入には時間を要するが、学術委員会と科目別分科会が協働し、課題抽出と導入に向けた方向性を示していく必要がある。

現在、一部の養成校では技師会と連携し、病院検査技師が評価者として外部評価の試行を開始している。今後はその成果と課題を日本臨床検査学教育協議会内で共有しながら検討を深め、外部評価導入を推進したいと考える。令和8年度(2026年度)には導入可能な養成校から順次試行



図2 臨地実習前技能修得到達度評価の標準化および外部評価導入のロードマップ

をお願いし、段階的に拡大することで、評価の質向上と全国的な標準化を目指す(図2)。

ま と め

臨地実習前技能修得到達度評価は、学内実習で修得した実技、データ解釈や臨床的意義の再確認を行い、学生が臨地実習に臨む準備を整える重要な役割を担っている。令和6年度の実施を通じて得られた課題を踏まえ、評価項目の標準化・スリム化および外部評価の導入を検討することで、本評価の質の向上と全国的な一貫性の確保が期待される。これらの取り組みを継続的に進めることにより、本評価の適切な履修が学生の円滑な臨地実習への移行を支え、ひいては質の高い臨床検査技師養成の実現に寄与することが期待される。

COI 状態

本発表に際し開示すべき COI 関係にある企業等はありません。

文 献

- 資料1_技能修得到達度評価 項目 2022-4～, 一般社団法人 日本臨床検査学教育協議会, 2023.
<https://www.nitirinkyo.jp/members> (会員校専用)
- 資料2_教育協議会臨地実習前技能修得到達度評価実施要項, 一般社団法人 日本臨床検査学教育協議会, 2023.
<https://www.nitirinkyo.jp/members> (会員校専用)
- 臨地実習ガイドライン 2021 (新カリキュラム対応版) 第二版, 一般社団法人 日本臨床衛生検査技師会, 2021.
<https://www.jamt.or.jp/data/2021/08/2021.html>